



藍は愛、そして祈り

旧約聖書を藍染めで表現する女性がいる。

崩れ落ちる集会堂、

がれきの下敷きになり
神への最後の任務を果
たし、そこで命を終え
たサムソン。

染色作家 鮎村秀子

神に選ばれ、特に優
れたサムソンにさえ、
美女に惑うという人間
的弱さがあった。深く
悲しい戒めである。

◇



藍がめの「花子」と向こうが「太郎」

旧約聖書・士師記(十三)章〜十六(章)のサムソンの

物語をテーマに染めた作品が、今年の第四十六回日本現代工芸美術展で文部科学大臣賞を受賞した。

鮎村さんとは在職中、ラジオ番組に出演してもらい、互いにカトリック信徒であったことから親しくしていただき、防府市富海のご自宅を訪ねたこともある。

主婦でありながら長く染色を手掛けられ、作品のテーマを一貫して旧約聖書に求めておられる。

もう二十年以上前のことだが、旧約のイザヤ書から「シオン讃歌」という作品を染められた時、ある雑誌に次のように書いておられた。

「囚われの苦しみから解放され、今は喜びに心躍らせてシオンの櫂の木の下を通る神の民。

そんな櫂の枝の向こうに輝くシオンを表現しました。

藍染めのかめが調子良く、力強い華を咲か

せてく
れまし
た。

祈り
で始ま
り、祈
りで終
わる私
の業を
神に捧
げたい
と思い
ます」



文科大臣賞受賞作の「ガザに盲いて」

旧約聖書を繰り返し読み、祈り、そこからテーマを見いだして藍で染めるという業に、深い神への信仰を感じたのである。

先日、改めてご自宅の工房をたずね「太郎」「次郎」「花子」「染子」の四つのかめを見せてもらった。

藍がめは鮎村さんの体の一部であり「藍は生きています」と言われる。また「藍は愛です」とも。

祈りといえば、静寂な聖堂の中でひざまづく姿を連想するが、かめの中の藍と話しなが

ら布を染めること全体が祈りのように思える。

鮎村さんにとって藍染めは神との語りであり、巡礼の道のようなものだろう。

日本現代工芸美術展で文部科学大臣賞に輝いた「ガザに盲いて」は鮎村さんが学生時代から五十年間、頭の中にあつたテーマ。

「今、パレスチナ・ガザ地区のかましい中『今こそ、これを創れ』という声を感じとり、ようやくサムソンと神への捧げものができた」と言われる。

同美術展の山口巡回展が山口市の県立美術館で十五日から二十四日まで開催される。

鮎村さんによる作品解説は十七日午後二時から。「ろうけつによる正藍染」。

「藍の調子は最高で、心うれしくいそいそと染めることができました」と言われる鮎村さん。

作品も素晴らしいものだろうが、それ以上に七十八歳になっても藍を求め続ける姿が輝いている。

(元山口放送取締役ラジオ局長)